

アル・カポネとシカゴ・ロータリークラブ

1899年1月17日ニューヨークのブルックリンで生まれたアル・カポネは、少年時代からニューヨークのストリート・ギャングのボスであったジョニー・トリノの子分になります。1920年にアメリカでは「禁酒法」が施行され、酒の密造が大きなビジネスになると考えたトリノはカポネと共にシカゴに移動します。カポネの配下にビールやウィスキーの販売担当や醸造事業担当などがおかれトリノの組織は企業組織のように統制のとれたものでした。

1925年トリノは刺客に襲われて重傷を負って引退し、その後はカポネが組織のボスとして君臨しシカゴの暗黒街を支配します。カポネは密造酒製造・販売のほか売春・賭博・恐喝など犯罪組織を統合して近代化し、さらにシカゴ市長ビックビル・トンプソンをはじめ、政治家、警察などの官憲を買収して組織の拡大と安泰化を図りました。

街ぐるみの不正に対処するために、1919年にシカゴの企業家6名が中心になって犯罪防止取締小委員会が設立されました。委員長のロバート・アイシャム・ランドルフ大佐が、生命を危険にさらす恐れがあるとして他の5人の委員の名前を公表しなかったことから、当初この委員会は「秘密六人委員会」と呼ばれました。

この委員会が発展的に改組されたのがシカゴ犯罪調査委員会です。この委員会は政治的イデオロギーや権力志向をいっさい持たないことで、他の組織とは一線を画しており、選挙の票や賄賂や暴力で意志を押し通すのではなく、シカゴにおける腐敗の性質や程度に関する情報や調査結果を広く市民に伝えることに重点を置いた活動をしました。この委員会の最初の委員長は、シカゴ・ロータリークラブの副会長を2期務めたヘンリー・バレット・チャンバリン大佐であり、委員のうち、9名は元シカゴ・クラブ会長であり、4名はシカゴ・クラブの会員でした。

シカゴ暗黒街に合法企業を装った犯罪組織が闊歩している現状を心配したチャンバリン委員長はシカゴ・クラブで次のように話しています。「犯罪は、集権化され、組織化され、商業化されたシカゴ市が生み出したビジネスです。あなた方がギャングに経営させている着実なビジネスなのです。それは決して歓迎されるものではないし、結果として試練の時をもたらすだけではなく、貧しさと冷え冷えとした天候をもたらすものです。もし世論が喚起されれば、犯罪というビジネスは破産に追い込まれるに違いありませんが、その決断は、それに従事している多くの人々の選択如何にかかっているのです。」

シカゴ犯罪調査委員会は、個々のケースを記載した多くの報告書を作成して、保釈保証人の不正をあばく調査を実施しました。せっかくギャングを逮捕しても、裏で結びついている保釈保証人の暗躍によってすぐに釈放されるようでは意味がありません。ロータリアンによって勇気づけられた委員会の努力が実って、11人の職業的な保釈保証人が大陪審に告発され、その職から追放されました。

チャンバリン委員長はラジオを通じてカポネ追放運動を展開し、組織犯罪を特集した番組の中で、差

し迫った大きな脅威に対する市民感情をあおりました。「カポネほど危険で、策略に富み、残酷で、脅威を与え、良心を持たぬ現代の犯罪者は他にいません。彼ほどにシカゴの名を汚した者は、現在も過去にも見当たりません。」と彼は力説しました。「ブルックリンの不良少年時代にはじまり、ポン引き、女の売買、殺なにびと人と段階を経て、この国で何人もなしえなかった地位にまで到達しました。」チェンバリン委員長はカポネを全能の怪物のように描きながらも、捜査当局に民衆の敵ナンバー・ワンを裁判にかけるだけの力があることを聴取者に理解させようとしていました。

チェンバリン委員長からシカゴ犯罪調査委員会の委員長を引き継いだのは、1852年にドイツ系移民の息子に生まれたフランク・レッシュです。彼はノースウェスタン大学で法律を学び、その後法律事務所を主宰し、ペンシルヴァニア鉄道の顧問弁護士を務めました。1928年に、彼はシカゴ・クラブで次のように語っています。「犯罪と政治の間にある結託は、過去の2年間に149件のギャングによる殺人事件があったという事実からも、ギャングのみの仕業ではないことを証明しています。」

レッシュは、公衆の敵に対して、長い戦いをいどみました。彼は単なる事実調査にとどまらず、犯罪全般と、とくにアル・カポネに対する取締りの強化を目指しました。レッシュはシカゴに赴任する何年も前から刑法の実務経験を積み、その後、カポネがまだブルックリンで少年時代を過ごしていたころから、検事としてシカゴの汚職や不正選挙の調査を行っていました。

1928年、レッシュは自ら願い出て、その年の予備選挙のさまざまな不正を調査する特別州検事に任命されました。わが身可愛さに、レッシュの調査活動に対する予算の割当を拒否した郡委員会に代わって、市民が彼の活動を支えるために一般から寄付を募り、レッシュのもとには15ドルもの軍資金が集まったので、結局、郡委員会も追加資金を出さざるをえなくなりました。勢いを得たシカゴ犯罪調査委員会は、62名の贈収賄や選挙違反を起訴して、ほぼ全員が有罪となりました。レッシュの作戦は、投票日前夜、警官隊を派遣させて、ギャングを全員刑務所にぶち込んで、投票が終わるまで留置することでした。

70台のパトカーが出動して、ギャングたちを刑務所に収容しました。

選挙当日、シカゴはこの40年間でもっとも平穏無事な投票日を迎え、一件の苦情も寄せられず、不正行為や脅迫事件も起きませんでした。

1929年2月14日には有名な「聖バレンタインデーの虐殺」が起り、対立していたバッグス・モラン一家が機関銃の乱射により射殺されました。事件の首謀者とみなされアル・カポネは、事件当日フロリダにいたというアリバイをでっちあげて、その罪を免れます。国民の間に「カポネを何とかしろ」という声が起こりますが、当時のシカゴ警察の中にはカポネの影響力が及んでおり、彼を逮捕することは至難の業でした。やっと1929年3月に武器の不法所持で逮捕しますが、判決は懲役1年であり、結局9ヶ月で出所してしまいました。

レッシュは、暴力に訴えたり、法的措置をとるのではなく、汚名を着せることによってギャングを一掃しようという計画を進めました。そこで、シカゴ犯罪調査委員会の力を借りて、悪名高いギャングや有名な殺し屋、誰もが知っていながら、犯罪を立証できない殺人者たちのリストを作りました。当初その

リストには 100 名近い名前がありま

したが、そこから 28 名を選びだして、「民衆の敵」と名づけて、警察本部長や保安官、捜査官全員に送ったのです。レッシュの憎むべき第一の敵はもちろんアル・カポネでした。そして「民衆の敵」を大物順に列挙しました。その目的は、シカゴの最も悪名高いギャングを白日のもとにさらして、捜査当局と法を遵守する市民の監視下におくことでした。シカゴ・トリビューン紙はこのリストを第一面に 8 段組みで掲載し、さらにこの記事は全国の新聞に転載されました。突然、シカゴ暗黒街のギャングたちはこれまでになく厳しい世間の目にさらされることになったのです。

「民衆の敵」という烙印は、1929 年に起こった世界大恐慌にあえぐ国民の苦しみによって増幅されて、カポネはありとあらゆる社会悪のスケープゴートになりました。もはや病める社会の一徴候として大目に見られることはなく、今やその元凶とみなされました。レッシュの見事な広報活動のおかげで、アル・カポネは二十世紀アメリカの最初にして最悪の犯罪者となりました。

ワシントン DC では、フーヴァー大統領がこの新たなカポネ追放運動に政府の威信を懸け、記者たちを招いて非公式の会見を行い、連邦政府はすでに兄のラルフ・カポネをとらえ、弟のアル・カポネが逮捕されるのも時間の問題だと説明しました。FBI は「アンタッチャブル」と呼ばれるカポネ逮捕の為の特捜班を設置し、カポネを追ってシカゴやマイアミに潜入させました。そしてついに 1931 年カポネを脱税容疑で摘発しました。

公正な裁判が行われていたらカポネは無罪であったとも言われていますが、裁判所も国民の世論に配慮して、脱税に対して懲役 11 年

という重い判決が言い渡されました。当時アメリカは 1933 年にシカゴで万国博覧会の開催を予定しており、その前にカポネ一家を何とかしたいという政治的意図もかなり働いていたものと思われる。

カポネは服役後 7 年で仮釈放されフロリダの別荘に戻りますが、

1947 年 1 月、病気のためにこの世を去ります。カポネが服役中、「禁酒法廃止」と訴えたフランクリン・ルーズベルトが大統領選に当選して、1933 年、禁酒法は廃止されました。シカゴ・クラブは 1939 年に、レッシュが 87 歳の時に、彼の長年に亘る活動に対して、シカゴ・ロータリー功労賞を授与しました。受賞に際して、彼は次のように語っています。「私は公衆の代表者と知り合いを深めることを、会員一人一人に強調したいと思います。そうすれば、長い目で見れば、いつか必ず世論によって説き伏せることができるからです。」

1942 年、シカゴ・ロータリークラブの会員ヴァーギル・ピーターソンがシカゴ犯罪調査委員会の委員長に就任し、1960 年代に至るまで、その地位に留まっています。

2008 年 6 月 6 日